

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

共同利用展示「水の器 - 手のひらから地球まで」： 企画から実現まで：第29回研究大会 研究発表梗概

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-11-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 久保, 正敏 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4856

共同利用展示 「水の器—手のひらから 地球まで」： 企画から実現まで

久保正敏

国立民族学博物館

1. ルースアライアンス展示から共同利用展示へ

民博は共同利用機関として共同研究の場及び資料・情報を共同利用に供してきたが、新たに展示の場も提供する「共同利用展示場」を本館展示場の一部に設定した。2010年3月25日～6月22日開催の企画展「水の器—手のひらから地球まで」はその第一回にあたる。1年半にわたり企画を検討してきた実行委員のコアは、これまで「ルースアライアンス展示」と称して連続展示を手がけてきた。これは、巡回展示とは異なり、主催館の特徴・所蔵資料を基本としながら、参加メンバーも固定せずテーマもゆるやかに連携する連続展示であり、これまでに、天理大学附属天理参考館第56回企画展「モチゴメの国ラオス—メコン河流域の暮らし」(2007年10月～2008年1月)、鹿児島純心女子大学附属博物館開館特別展「川内川—一川と人の暮らし」(2008年10月～2009年4月)、天理ギャラリー第136回展「モンスーンアジアの竹文化—素朴な技術と造形の美」(2009年2月～3月)を実現してきた。

このメンバーの一部は、人間文化研究機構(機構)連携研究「人と水」のメンバーと重なる。これは、この5年間、総合地球環境学研究所(地球研)秋道智彌教授を代表者に、機構内外56名の研究者が、身体、信仰、社会、環境、生業、動植物、風景等と水の関わりを研究するもの。私もその一人として、水の器を切り口に研究成果を展示として公開することを企図し、機構の連携展示の枠組に応募して資金援助を得た。こうした経緯から、展示の主催者は、機構、民博、地球研の三者とした。また、地下水を町作りに生かす愛媛県西条市や地元吹田市とも連携するなど、水の器は、様々なセクター間の連携を図る上で格好のテーマだった。

2. 展示コンセプト

連携研究「人と水」は人文社会系と自然科学系の融合を目指しており、本企画展でも民博所蔵資料を中心としつつも自然科学研究成果を提示することを狙った。実際、水の器は、道具としての器から、自然や人工の水源、地下水帯水層、水循環の担い手や地球自身にまで至り、水文学や環境生態学など関わる研究分野も幅広いため、

地下水や環境、水質の問題にも着目した。ミネラルウォーターの水質を通して地球環境を研究するメンバーから日本各地の名水ボトルの提供を得たのを契機に、世界のペットボトルの収集を計画した。昨年7月から、実行委員の所属する民博、地球研、東海大学、天理大学の教職員、総合研究大学院大学院生に収集を呼びかけて50名から総計300本余が集まった。これに基づいた展示は、実行委員以外の方々も参加した、「持ち寄り展示」、「参加型展示」と言える。

展示コンセプトとしては、身近な道具から始めて、近年盛んに議論される「水の危機」までを考えるきっかけ作りを狙いとした。道具は身体の外延であるので、手をカップ状に組み合わせた身体の器を根源とし、地球までを視野に含むことを示すため展示タイトルを「水の器—手のひらから地球まで」とした。そして、水が手元に至る「水の道程」を遡り、水源から地球までを見渡し、そして地球規模に広がったペットボトルという新しい手元の器に立ち戻る、という道筋に沿って、1. 生活世界の身近な水の器、2. 多様な水源、3. 水の器・地球、4. 水のペットボトル、の4部分で構成した。

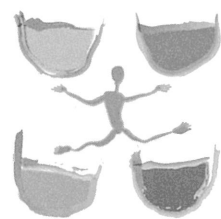
これら全てが器であることを示すために、4つのカップ形を中心の人型が結ぶ形を「器」の字形に見立てて本企画展のロゴとした。これは、水の器とは、人と自然、水と暮らし、人と人の関係を映すことを含意する。

3. 展示構成

約4000点を超える民博所蔵の水関連の道具類の中から約100点に絞り込んだ。元来地味なモノが多いので、白い壁と展示台をベースとする美術展風の展示空間とした。常設展示場にも関連する資料が多いので、企画展示場と常設展示との連携もこころがけた。

(1) 生活世界の身近な水の器

ここでは、手元から水源へと遡る道程に沿い、「掬う」「注ぐ」「ためる」「運ぶ」「汲む」の



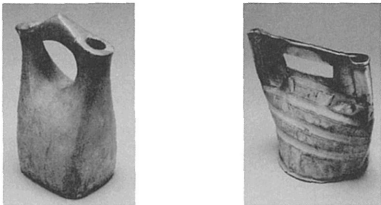
企画展のロゴ



美術展風の展示

動作で分類した民博所蔵資料約100点を展示した。もとより道具は複能的なので、分類はあくまで便宜的だ。この道程は、共用の大きな器から個人用の小さな器へと変化し、その途中に水を分ける行為を含むから、器は人間関係を媒介するモノでもあることも表現した。また、ヒョウタン、タケ、ヤシ、樹皮、など植物素材、貝殻、動物の内蔵や皮、角、卵の殻、などの動物素材、気化熱を利用した土器製の壺や金属加工技術を反映した銅製の壺など、器の素材が地域の自然環境や技術を反映していることを示した。

面白いのは、下に示したように、土器製水差しと鉄缶の再利用水差しが同じ形をした例であり、形の保守性、あるいは身体所作の慣性を反映していると見なせるし、逆にモノが身体を規定する、と見なせる。



スーダンの水差し 二例

(2) 多様な水源

生活世界の水源は不可視の異界との接点、たとえ濁った川であろうと大切な水源だからこそ人は畏敬の念を抱いてきた。こうした水源に対する思いはシンボリズムや図像で表象され、聖水など儀礼的なシンボル作用に表れる。これらを示す写真や聖水の器展示のほか、自噴する地下水を町作りに利用する西条市の活動をスライドショーで示した。

ここで用いた水源の写真や(1)のコーナーの道具の利用場面写真の多くは、民博所蔵の「民族学調査写真アーカイブズ」を活用したものであり、これも本企画展の特徴の一つである。

(3) 水の器・地球

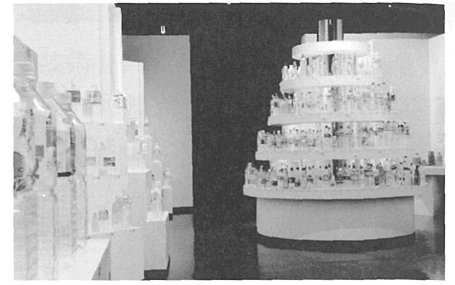
水の惑星と呼ばれる地球だが、人が容易に入手できる淡水は総量の0.01%に過ぎず、しかも時と場所で偏在しており、それゆえに器の数々が工夫されてきたことを、水文学の研究と連携する写真や図表で示した。また、水の欠乏と汚染を論じる「水の危機」や、砂漠化、水資源の濫用、国際河川でのダム建設と下流域での地表水不足、国境をまたぐ地下水の減少など、地球規模の問題を可視化するために、GK TECHが開発したデジタル地球儀「さわれる地球」によって水の偏在を示す分布図などを提示した。特に、米国中部平原など、使い切りの「化石地下水」汲み上げで栽培された小麦やトウモロコシ、それを飼料とする畜肉が国際取引され、これら食品に姿を変えた「バーチャル・ウォーター」の大量消費国が日本であることも問題提起した。さらに、地球研研究者による地下水の水質分析が環境の指標となることを、収集された日本の名水ボトルと水質を表す「ヘキサダイアグラム」により提示した。

(4) 水のペットボトル

地球規模の視野から身近なペットボトルという器に立ち返り、グローバル現象と地域文化の相関を考えるコーナーである。素材ペットの基礎と製法解説、世界のペットボトルの形やラベルの多様性を230本で構成したボトル・タワーで示すとともに、個人携帯の新しい器としてのペットボトルがもたらす生活文化の変化、例えば水源と個人が直結されたことで水源への畏敬が失われているのか、「らっぱ飲み」など身体作法の変化を生んでいるのか、ボトル転用例、等をペットボトル以前の器である水筒と比較しつつ考える展示とした。ボトル・タワーは、ラベルの裏も見えるよう鏡面を貼り付けた階段状円筒で構成し、オブジェとしても面白いものとなった。そして、自分の問題として水を考える問いかけで展示は終わる。

(5) 地域展示との連携

第1コーナーで展示した資料は、水関連民博所蔵資料のごく一部に過ぎず、常設の地域展示場にも本企画展の分類にとられない多様な水の器が展示されており、生活再現展示や1/10民家模型群なども見所。それらを観覧者が発見するためのオリエンテーリング・マップを用意し、水の器をテーマに地域展示を自分で「通文化的観



スーダンの水差し 二例

覧」することを促した。民博展示の新しい見方につながることを期待したものである。

4. 関連イベントと展示記録

開催期間中、大人向けのシンポジウムから子供向けのワークショップまでいくつかのタイプのイベントを、地球研、東海大学、西条市、吹田市、河川環境管理財団などとの連携で開催した。

企画展はわずか3ヶ月で終了し、その翌日に始まる撤去作業には、虚しさ、寂しさがつきものだが、展示を記録し残しておく活動も重要である。そこで実験的にQuickTime VRのパノラマムービーを活用した記録を進めた。これは展示記録としてだけでなく、ウェブ上の仮想展示としてリアル展示への誘因効果や、出前展示にもつながるだろう。

5. おわりに

多様なテーマと問題提起を含んだ展示企画に協力いただいた実行委員はもとより、ボトル収集に協力いただいた方々、協力いただいた関係諸機関、図録作成とロゴデザインを担当した見聞社、展示施工を担当したフジイ企画、触れる地球儀を開発したGK TECH、そして演説と運営にあたった民博各セクションのスタッフに深謝する。

引用・参考文献

- 田口理恵・久保正敏・秋道智彌(編集) 2010 『水の器―一手のひらから地球まで』、人間文化研究機構
 久保正敏 2010 「水の器から見えるもの 環境映した人びとの知恵」『産経新聞』2010年4月17日(土)夕刊
 連携研究「人と水」研究連絡誌『人と水』第0号～第8号、昭和堂